「80億馬力が走り出す」

金沢大学附属中学校　2年2組　二見日向子

今年の夏休みは特別だった。お墓参りの雨降りも初めてだったし、祖父宅への帰省も、連日の雨で田舎に巣籠りだった事も記憶には無い。いつもと同じなのは、私の宿題が殆ど手つかずな事くらいで、それ以外は「らしくない夏」だった。

夏は海。青い空、ビーチサンダル、日焼けのヒリヒリ。タイミングを誤ると、人の波で泳いでいる様になるのだが、それはそれで、「らしかった」のだ。

報道される世界の異常気象も、繰り返せば当たり前になっていくのだろうか。その「日常」はなにか陰鬱で、重苦しいイメージがつきまとうので前向きには捉えられない。

いつかの写真を見ながら、ふと海と自分たちを比べたいと思った。海洋プラスチック問題や海面上昇、ラニーニャ現象等、海が比べられている。つまり、海は広いな大きいな、なので多少無茶もしても大丈夫、その無茶が今年はこれくらいでした。と言う具合に。

コクヨ　ケ−20　20×20

海が以前の海と比べられているのだ。私は、これでは海が只々壮絶に寛容に且つ、無言で受け止めてくれている私達の行いの結果を直視しようとしていないと感じる。賛否はあれど、地球温暖化に私達が関与しているのは間違いない。その影響で、国が存亡にかかわるなんて所も出てくる。

今日の世界の人々全員で、海に飛び込んだらどうなるだろうか？いろいろ調べてみたが0.005mmしか水面は上がらない。アルキメデスも拍子抜けだ。約80億の人が一致団結しても、到底追いつかない規模とスピードで地球環境は刻々と変化している。実際に確かめてみようと、浮き輪を膨らましている間に、いくつかの国は海底都市遺跡になろうとしている。

世界は広く大きく、且つ多様だ。それぞれの場所で、各々の価値がある。ちょっと、物やお金の有無から離れてみよう。力の大小、強弱から離れてみよう。奪う、与える、やりとりの概念から離れてみよう。地球が無言の

悲鳴をあげているという現実が目の前に、静かに、只確実にぶら下がっている姿が見えるはず。

危ないと認識すること。認識がない人にはヒントを出すこと。千分の数mmしか海面にインパクトを与えられない80億人だが、言葉があり、身振り手振りも、声もある。私達は瞬時につながることができる。これが私達の力だ。共に響き合うために私達はつながる。

もう一つ私が信じている力がある。警鐘を鳴らされても、私達は怖がるだけではないという事だ。何をすべきか各々考える。一人ろっ考えたら、もう200億通り以上のアイデアを瞬時に私達は手にできる。すごいのだ。

「らしくない」日常が来る前に、つながろう。声を掛け合おう。思いを巡らそう。走りだそう。準備はいらない。

天気がよくなってきた。なんだか、気分も晴れてきたよ。

さぁ、海にでも行こうか？

コクヨ　ケ−20　20×20